

題:豊太郎の人生における失敗

①私はこの舞姫を読んだ時にまず、エリスという人物がとる行動の一つ一つにわざとらしさと苛立ちを覚えた。そしてエリスのとる行動が全て不自然に感じた。そのため私はこのレポートでエリスのとる行動から、「エリスは最低だ」という結論に至るまでの経緯を説明する。

そして最低な女エリスに人生を狂わされた豊太郎には、自分の意思を持ち、責任感のある人間になることが欠けていたんだということを述べたい。

②まずエリスはどのように最低なのかというと、エリスは元々豊太郎の金を目当てに近づき、豊太郎を利用しようとしていたのである。エリスの不審な行動は豊太郎との出会いから始まる。

豊太郎がクロステル巷の古寺の前で泣いているエリスに声をかけ話を聞いている時、話の途中でエリスは豊太郎の肩に寄り掛かっている。これは、豊太郎の気を引くためにとった、エリスの計画的な行動であると考えられる。

又、この時の「君は善き人なりと見ゆ。彼のごとくむごくはあらじ。」などという言葉も、お人好しな豊太郎にエリスを助けざるを得ない状況を作り上げるというエリスの作戦であるように見える。

その後豊太郎を家に招いたエリスは、豊太郎を家に入れる前に母親に『豊太郎という日本人がワイゲルト家の貧しい暮らしを助けてくれるかもしれない』というようなことを説明している。それはエリスが豊太郎を家の前まで連れて来た時と、エリスだけが家に入り母親と話し合った後の、母親の豊太郎に対する態度の違いから分かる。エリスと話し合う前の母親は豊太郎に対して「戸を激しくたたて切りつ。」のように大変無愛想だが、その後「慇懃におのが無礼の振る舞ひせしを詫びて」と丁寧に対応している。これはエリスが母親に『豊太郎はお金をたくさん持っているように見える。』と言ったからだだろう。もし言っていなければ母親は再びドアを開け、豊太郎に丁寧に詫びて家に入れることはなかっただろう。

エリスの家に入り、豊太郎がエリスの部屋に入ると、エリスは「高価き花束」を生けてある横に「羞を帯びて」立っていた。それを豊太郎は「彼は優れて美なり。」と感じている。つまりエリスは、自分の美しさが「高価き花束」に引きをとらないくらいのものであると知っていて、それをアピールし豊太郎の気を惹こうとしたのだと考えられる。

そして豊太郎が自らの時計をエリスに渡した時にエリスは涙を流した。又、そのお礼に豊太郎の下宿まで花束を持って来ている。これらの行動から、次の助けを期待していることが分かる。つまりエリスはこうすることで豊太郎がまた金銭的援助をしてくれると思っているのだ。

この全てのことから私は「エリスは金目的で豊太郎を利用した最低な女だ」と考える。

③豊太郎はエリスによって人生を狂わされたのだ。

本来なら明治22年に独逸での任務を終え、日本に帰る予定だった。しかしエリスとの交際発覚により免官になったので帰れず、エリスが妊娠したことが分かった時には P282.L15.「さらぬ～まし。」とあるように大変困っている。

天方伯に「我と共に東に帰る心なきか、」と聞かれた時には P295.L2.「あなや～起これり。」という思いが豊太郎の頭の中にはあった。この2点から、豊太郎が抱いていた『日本に帰りたい』という気持ちは大変大きかったことが分かる。にも関わらず日本に帰ることをエリスに伝える決心がなかなかつかないのは、豊太郎が昔から所動的な人間であったためエリスに嫌われるのが怖かったからだとは私は考える。

豊太郎はエリスに日本に帰ることをなかなか伝えられず、やっとのことで伝える決心をし帰宅したが、その頃にはすでに精神的に限界が来ていた。もし自らの口でエリスに伝えることができているならば P290.L15.「それも～得ん。」や P291.L7.「我が東に～なりなん。」からわかるようにエリスは元々豊太郎の帰国に着いて行くつもりだったのだから、エリスは発狂などしていなかったはずである。エリスが発狂していなければ豊太郎はこの後送った人生とは違う人生を送っていただろう。

このような所動的な性格故に豊太郎は精神病という形でエリスを失うという苦しい現実を作ってしまう、これからの人生をそのような過去を背負って生きていかなければならないことになってしまった。

もし豊太郎が所動的な性格でなければ、この最低な女エリスに人生を狂わされることはなかっただろう。

このことから分かるように所動的でなく自分の意思を持ち、責任感のある人間になることが自分の人生を悪い方向に導かない最低条件なのである。

参考:現代語訳